労組日本プロ野球選手会をつくった男たち

目次

序章　日本プロ野球選手会の存在意義とは何か　007

第1章　労組創設者、中畑清　013

第2章　目に見えないファインプレー、陰の功労者たち　033

第3章　ヤクルト選手会を復帰させた男、尾花高夫　073

第4章 FA制度導入の立役者、岡田彰布の「仕事」 091
第5章 スト決行、古田敦也の決断 109
第6章 田尾安志、新球団という葛藤 149
第7章 「ポスト古田」に自ら手を挙げた宮本慎也「ここからやろ」 167

第8章 踏まれても踏まれても真っすぐに、『はだしのゲン』になった新井貴浩 193
第9章 10年後の選手のために 會澤翼 215
あとがき 233
主要参考文献 239

初出：集英社オンライン、集英社『kotoba』2025年春号

序　章

日本プロ野球選手会の存在意義とは何か

ＷＢＣ（ワールド・ベースボール・クラシック）での日本代表の優勝やメジャーリーグにおける大谷翔平の活躍を見るにつけ、この隆盛をもたらしたみなもとについて考える。それは１９８５年に産声（うぶごえ）を上げた、労働組合日本プロ野球選手会のことである。

同労組設立以前のことを、田尾安志（東北楽天ゴールデンイーグルス初代監督）はこう語った。

「華やかに見えるプロ野球の世界ですが、実はがんじがらめで、選手が行使できる権利といえば、辞めることしかなかった」

１９５１年にＧＨＱ（連合国軍最高司令官総司令部）の提案により米国から取り寄せられたルールのもと、ＮＰＢ（日本野球機構）が作成した統一契約書は、圧倒的に選手側に不利な内容になっていた。現役時代に中日ドラゴンズの選手会長としてチームメイトの要望を粘り強く球団側に伝え続けた田尾は、当時の球団代表に疎まれ、３年連続リーグ最多安打という実績を持ち、ファンに愛されていながらも、キャンプイン直前の１９８５年1月24日に、西武ライオンズ（現・埼玉西武ライオンズ）へトレードされた。

１９６５年に導入されたドラフト制度以降、プロ野球選手に職場とする球団を選択する自由はなく、監督やフロントによる極めて恣意的な理由で放逐されるか、飼い殺しにされてしまうといった例は少なくなかった。

これが１９８５年を境に劇的に変わる。選手の権利が格段に向上していったのである。やがてＦＡ（フリーエージェント）制度が認められ、年俸が飛躍的に上がり、移籍も活性化した。それに伴いセ・リーグとパ・リーグの格差が埋まった。何より大きいのは、選手の意見がＮＰＢ側に届くようになり、プレーする側の主体意思が明確に発信されるようになったことである。

２００４年の球界再編に向け、当時の渡邉恒雄（わたなべつねお）・読売ジャイアンツ（巨人）オーナーから「たかが選手が」と侮辱された日本プロ野球選手会長の古田敦也が決行したストライキ。さらには、東日本大震災が起きた２０１１年に、同じく当時の選手会長・新井貴浩（たかひろ）**（現・広島東洋カープ監督）**が文部科学省に掛け合って実現させた公式戦開幕延期。これらは、日本プロ野球選手会という集団交渉の権利が担保された労働組合組織の基盤があったからこその結実であった。意見が通れば、当然ながら選手のモチベーションは上がり、パフォーマンスの向上にもつながっていく。

一方で、昨今、「選手会に入っていることのメリットを感じない」として脱退し、メジャーリーグに移籍していく若い選手たちがいる。しかし、ポスティング移籍も含めて、自分たちが現在当たり前のように享受している権利は、勝手に転がり込んできたものでは

ない。先人たちが現役時代に、自身のプレーを後回しにしてまで奔走して勝ち取ったものである。

そして選手会を辞める選手が憧れるメジャーリーグには、養老年金をはじめとする素晴らしい環境が整備されているが、これも「世界最強の労働組合」と呼ばれるＭＬＢＰＡ（メジャーリーグベースボール選手会）の努力によって成立したことを、彼らは知っているだろうか。特に１９６６年にＭＬＢＰＡ委員長に就いたマービン・ミラーは、元全米鉄鋼労働組合のエコノミストで、それまで一度球団と契約を結ぶと半永久的に拘束される「保留条項」によって選手の地位が著しく貶（おとし）められていることに注目し、「これは富を独占したい経営者たちによる奴隷制度である」と看破すると、その改革に着手した。やがて選手がオーナーと同等に折衝できるところまで、その地位を引き上げていった。

１９６０年のメジャーリーガーの平均年俸は2万ドルに及ばず、ハンク・アーロンやミッキー・マントルといったスーパースターでさえ、たった10万ドル（当時のレートで約３６００万円）であった。それが、現在（２０２５年シーズン開幕時）の平均年俸は５１６万ドル（現在のレートで約7億６９００万円）、大谷翔平は10年7億ドル（約１０３０億６０００万円）という契約を２０２３年に結んでいる。換言すれば、いったいどれだけ選手が搾取されて

いたことか。

メジャーリーグの発展はＭＬＢＰＡとともにあり、プレーヤーズファーストの環境づくりは、日米ともに選手会と密接に絡んでいる。ミラーは当然ながら、オーナーたちに蛇蝎のごとく嫌われていた。しかし、死後あらためて彼の大きな功績が認められ、２０２０年にアメリカ野球殿堂入りをしている。

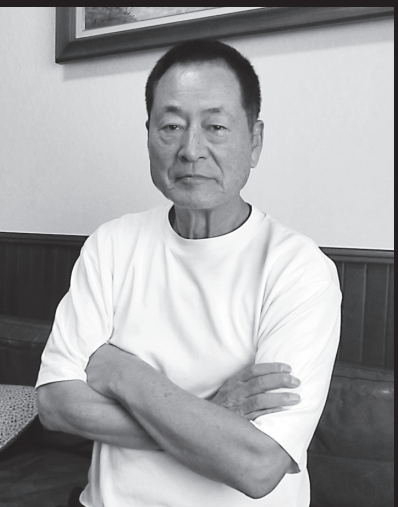
日本では、ミラーの就任から19年が経過した後、ようやく選手会労組が立ち上がった。そこからの現在に至る艱難辛苦の歴史を知れば、軽々しく「メリットはない」とは言えないのではないか。

プロ野球選手の権利は、いかにして勝ち取られてきたのか。エポックメイキングとなったこの「労組」の歴史をひもといていく。

なお、本書では基本的に敬称を略し、肩書・球団名・選手の登録名は当時のものとした。

第 1 章

労組創設者、中畑清



「そりゃあ、苦労したもん。成立させるには、ものすごい時間を費やしたし、とにかく水面下で事を運ばなきゃいけなかった。それが大変だったよ」

選手会労組設立の立役者である初代会長の中畑清（巨人・当時）は、自宅でのインタビューで40年近く前の記憶を手繰り寄せた。聞き手の関心は、まず「組合をつくることの必要性を、いつから、なぜ感じたのか」ということにあった。

「それは自分が巨人の選手会の副会長になったときから考えていた。会長がキャッチャーだった吉田（孝司）さんで、俺はそれを補佐するかたちで結構若い頃から、球団にものを言う立場には就いていたんだ。ところが当時のプロ野球界は保守的な世界で、とにかく一方通行だった。労使関係なんて発想がほとんどなくてね。とにかく（球団の）言いなりだったよ」

プロ野球選手とは、庶民の感覚からすれば、天文学的な年俸を享受し、流行りのブランド服を身にまとい、高級車のハンドルを握り、オフには人もうらやむ生活を雑誌のグラビアに飾る――といった一見、派手な職業で、その世界に入りさえすれば勝ち組であるかのように思われていた。

しかし、野球協約にはいくつも問題があった。選手たちが署名を強いられる統一契約書

は、日本の労働法に照らし合わすと、あまりに違法な表現が多すぎた。ＭＬＢＰＡ（メジャーリーグベースボール選手会）がかつて「奴隷条項」と呼んだ保留条項があり、契約更改の権利は無期限で球団側にあった。１年のほとんどの時期を拘束されるだけではなく、選手の肖像権もＮＰＢ（日本野球機構）や球団に一括管理され、それに伴う収益のかなりの部分を取られていた。試合数や開幕時期などの事案が一方的に決められ、選手が感じた不合理を主張する場が存在しなかった。中畑は少し顔を歪（ゆが）めながら、実態を吐露する。

「一見、派手に見える生活と、現実とのジレンマ……その闘いでもあったね。高い給料をもらっているのは一握りの選手だし、出費も多く引退後の保障もない。それにプロ野球選手は個人事業主で一人ひとりが社長だというけれど、その社長にはまったく自由がなかったんだ。移動日もオフも、ものすごく拘束される。身体を休めたくても、球団に言われればイベントにも出なきゃいけない。大事にされているように見えて、実際は選手の要望なんてまったく聞いてもらえず、搾取され続けてきた。球場の駐車場を使わせてくれとか、選手が使用する施設に冷暖房をつけてくれとか、そんな低レベルの話も却下された。それで自分が選手会長になったら、やはり組合をつくるしかないと思ったわけだよ」

そして１９８３年、中畑は巨人の選手会長に就任する。ちょうど年齢的にも、１９５４

（昭和29）年1月生まれの中畑の同級生たちが円熟期を迎えていた。

中畑は、球団ごとに選手がバラバラであれば、行動を起こしても風穴が開かないことを痛感していた。自分と年齢の近い選手たちが、各チームの主力を担っていたが、たまに会って話すと皆、同じように苦労している。プロは選手ごとに球団と契約を交わすわけだが、「全員でまとまらないと、いつまで経っても変わらないぞ」と説いて回った。「メジャーの選手たちがユニオンをつくって、その規模がどんどん大きくなっていく。その流れも見ていたしね」

１９８４年末にメジャーでは、選手会と経営者で結んでいた基本協約が切れて、新しい協約の合意形成が図られていた。〝絶好調男〟はＭＬＢＰＡの動向をずっと観察していた。

現在は自主トレや日本代表チームなどを通じて、他球団の選手との交流が頻繁に行われているが、当時はそうした付き合いはないに等しかった。それでも中畑は、同世代の仲間に密かに声をかけていった。

かつては国労（国鉄労働組合）が健在で、ストライキを行うことも珍しくない時代があった。中畑自身の野球人生の中でいわゆる労働組合と直接の接点はなかったが、シンパシーは持っていた。

「うちの実家は福島の酪農家だし、労組と直接の接点はなかったよ。でもね、団結の崇高さは感じていた。ニュースを見ていても労働者が自分たちの権利のために闘うストライキってのは確かに必要だと思っていた。特に野球はチームプレー、団体競技だから、この闘い方は重要だと感じていた。ただグラウンド外での団結については、まったくの未体験だった。そこで労組を立ち上げる上で相談をした人物が二人だけいたんだよ」

それは誰なのか。

「一人は長谷川のじっちゃん。巨人の球団代表だったじっちゃんとは、ずっと腹を割って話せていたんだよ」

中畑は43歳年上の長谷川実雄（じつお）・球団代表を、「長谷川さん」ではなく「じっちゃん」と呼んだ。彼の名前が出てきたのは意外だった。長谷川は読売新聞の記者出身で、巨人の球団代表を10年以上にわたって務め上げた人物である。江川卓（すぐる）の「空白の一日事件」のときも対応に奔走していたことで知られる。労使関係でいえば会社側の人間であるが、極めて親身になってくれたという。ソファに座る中畑の表情が柔和にほころぶ。

「契約更改で毎年顔を合わせていたんだけど、面白い人でね。膨大な資料を机に積んで『中畑君、これを見るか？　この資料、君をマイナス査定するために上がってきたものな

んだぞ』って言うんだ。『どうだ、詳細な数字が出ているが見るか？』『代表、そんなもん私は見ませんよ』『そうか』ってやりとりが続いて。

こっちは、マイナス要因を言われて現状維持かと思っていたから『代表、月に10万円でいいから上げてくださいよ』と言ったら、じっちゃんは笑うんだ。『10万でいいのか？20万上げてやるよ。君との契約更改は気持ちいいんだよ』と、球団は年俸を抑えようとしても、そんな感じで選手の立場や気持ちをすごくわかってくれる人だった」

長谷川は駆け引きをしない、竹を割ったような性格の中畑を愛していた。契約更改交渉の席上でも、心が通じ合う瞬間があった。

「だから、この人ならと思って相談したんだ。そうしたら応援してくれてね。『選手の組合が実現したら、ものすごい変革になるぞ』と言ってくれた。じっちゃんは大きなお金が動くことを見抜いていたんだね。そこで一つアドバイスをもらった。『絶対に内密にして事を運べ』とね」

プロ野球選手が団結して労組をつくるという動きは、これより数十年前にもあった。別所毅彦（たけひこ）（元・南海ホークス／巨人）が中心になって結成に向けて動いたが、事前に情報が漏れて潰された。その過去を知る長谷川は、中畑に情報漏洩（ろうえい）の危険性について忠告していた

のである。

中畑が労組を立ち上げる上で相談をした、もう一人の人物は誰だったのか。それは西武ライオンズの球団代表だった坂井保之である。巨人とは当時、球界の盟主の座を争っていた西武の幹部だ。

「あの頃の俺はＮＰＢの選手福祉委員会の代表だったんだ。それでよく要望を出していて、球団は違っていたんだけど、同じ委員会の坂井さんとは交流があった。坂井さんは理解があって、先進的な考えを持っていた。西武は管理が厳しいと聞いていたけど、坂井さんなら、わかってくれると思って話したら、同調してくれたんだ。今のままではプロ野球界はだめになると危機感を持っていたね」

坂井は球団の枠を超えて野球界全体のことを考える発想を持っていたというが、それは彼の半生を調べると頷首（がんしゅ）できる。

１９６０年代、坂井は岸信介（のぶすけ）元首相の書生をしながら、ＰＲ会社に勤務していた。そうした折、東京オリオンズ（１９６４～68年）が親会社の大映の経営不振から、ロッテに実質的に球団譲渡された。大映の永田雅一（まさいち）社長は新球団ロッテオリオンズ（現・千葉ロッテマリーンズ）のオーナーについて知己の深かった岸に相談すると、岸は自分の筆頭秘書で

あった中村長芳を送り込み、坂井もまた補佐としてロッテのフロントに入った。

言うなれば出発点が身売りされた球団であり、いきなりカオスの中からプロ野球界での経営者人生が始まっている。以降、いくつもの球団を渡り歩き、坂井は存在感を発揮していく。

西日本鉄道が西鉄ライオンズを手放した１９７２年には、中村とともにその窮地を救うべくロッテを離れ、新球団の福岡野球株式会社（中村が個人で設立した会社で、ゴルフ場開発の太平洋クラブのネーミングライツで太平洋クラブライオンズとなる）の社長に38歳の若さで着任して難局を乗り切った。

やがて西武鉄道への身売りが決まると、次は埼玉・所沢へ移った。12球団で最も貧しい球団から、いきなり球界で最も予算が潤沢な西武ライオンズへの転籍である。ここで坂井は黄金時代を築き上げ、東尾修、田淵幸一、秋山幸二、工藤公康、伊東勤、清原和博、渡辺久信といった常勝軍団の選手たちとの契約更改を一手に引き受けていた。

坂井は予算規模の異なるいくつかの球団でキャリアを重ねた経営のプロであると同時に、選手の置かれた環境を熟知する人材育成者でもあった。そして坂井は「プロ野球はこの国の公共財」という確たる信念を持っていた。

その坂井が、中畑に言った。「選手の組合をつくるというのはいい考えだが、もしもそれを日本でやったら、大変なことになるぞ」

中畑は返した。「その大変なことをやりたいんですよ。大変なことをしないと、変わらないんです」

叩(たた)き上げの社会部記者上がりで読売一筋の長谷川と、「昭和の妖怪」こと岸信介の下で政治手法を身につけ、複数球団を渡り歩いた球団マネージャーの坂井。キャリアの異なる二人の理解者に相談しながら、中畑は動き出した。

1982年7月、プロ野球選手会を組合にするという提案が初めて選手会事務局から出された。この年の暮れに象徴的な一つの事件が起こる。当時のロッテオリオンズの捕手・高橋博士(ひろし)が、提示された契約条件に納得できず保留していると、球団側が一方的に解雇通告（自由契約の公示）を出したのである。

通常であれば、戦力として見ていないなら早い段階で自由契約の公示をする。逆に契約の意思があるならば、折り合うまで話し合うものだが、師走になって突然のクビだと選手は路頭に迷ってしまう。

選手会事務局は1983年1月11日に、高橋の不当解雇撤回の支援活動を始めた（高橋

は再契約後、任意引退となり、補償金が支払われた）。選手の立場の弱さがあらためて浮き彫りになる中、同年7月23日、選手会の臨時総会において組合結成の方針が決定された。規約は事務局が立案することとなる。新しい野球協約施行に向けた選手側からの提言である。

中畑は秘密裏に発案を共有するメンバーとして落合博満、真弓明信（あきのぶ）、田尾安志、梨田昌孝ら、１９５３（昭和28）年度生まれの選手会の仲間（プロ野球28会）に声をかけた。やがて彼らも立ち上がっていった。

「正直みんな、よくわかっていなかったと思うんだけど、『キヨシ、お前がやるなら力になろう』と言ってくれて、そこで意思統一したんだ。我々は何のために組合をつくるのか。それは『選手が消耗品やアクセサリーとしてではなく、組織として法律で守られる地位に就くこと、そして機構や球団と対等に物が言い合える関係になること』。この目的意識がブレると圧力がかかって揺さぶられたときに、一気に潰されるから」

米国の選手会がまだ「御用組合」と呼ばれていた１９６０年代は、オーナーの息がかかった選手たちが「プロスポーツに組合はいらない」といった発言をメディアに伝え、切り崩しに加担していた。中畑は選手の意識として、「経営者に可愛がられることではなく、正当に向き合える尊厳を皆で持とう」と説いた。

水面下で組合結成に向けて走り出したが、メンバーは全員現役選手である。事務局長に誰かを据えないと実務が回らない。中畑は日本ハムファイターズ（現・北海道日本ハムファイターズ）を退団した選手で西井敏次（としつぐ）という男を事務方に入れた。

１９８４年2月のキャンプインと同時に、西井事務局長は動いた。各球団のキャンプ地を回り、選手たちに組合結成の趣旨についてのレクチャーを施したのである。アンケートを取り、加入を促すと、即座に全員が加入届を提出してくれた。

東京都地方労働委員会（現・東京都労働委員会。以下、都労委）に労働組合法上の資格審査の申請をするため、各球団の選手から拘束時間や休日の日数といった情報を聞き取る必要があった。練習や試合、イベントなどでどれだけの期間、選手たちは拘束されているのか。各チームの選手会に協力を依頼して徹底的に調べて弁護士に提出すると、「これは平均的な労働者以上の縛りだ。組合をつくる意義は十二分にある」との返答があった。一年のうちの半年がシーズンで、ほかにもキャンプ、オフには球団行事が目白押しで選手が自由に使える時間は驚くほど少ない。

１９８４年7月21日、選手会の臨時総会が開かれ、事務局が提案した規約案が承認された。まだ労働組合法上の労組となる要件は満たしていないが、そこに至るためのステップ

としてアウトサイダーユニオン（法外組合）が立ち上がり、中畑が会長になった。対外的に表に出た中畑は、ここから畳みかけていく。

翌85年9月30日。甲子園で阪神戦のあった次の日、中畑は都労委に組合資格審査請求を提出する。そしてオフに入った11月5日、中畑は自宅リビングで一本の電話を受けた。

「中畑さんですか、こちらは……」――福音だった。ついに都労委は選手会を労働組合として認定した。

「まだ携帯なんてない時代じゃない。だから家で連絡を待っていたんだけど本当に嬉しかった。報われた気がしたね」

そして同年11月19日、労働組合日本プロ野球選手会は法人登記された。晴れて正式な労働組合として誕生したのである。しかし、当時の報道を見ると、決して好意的なものばかりではなかった。

「何千万円ものお金をもらっているプロ野球選手というイメージがあって、そんなに恵まれている連中がなんで組合をつくるんだとね。だから、俺はまず多くの人が理解しやすい待遇改善の提言を表に出していったんだ。それはマスコミを通じて理解してもらうためだった。こんな状態では〝夢のある世界〟とは言えないでしょうと」

中畑は選手が安全な環境で全力プレーができるよう、フェンスにラバーカバーをつけることや、膝の負担が増える人工芝の改善などを訴えた。ゆくゆくは移籍の自由であるFA制度の導入も視野に入れていた。

ところが、この方針に同志であったはずの重鎮との間で齟齬が生じていく。三冠王・落合博満である。ロッテのマネージャーだった松原徹（のちに選手会の事務局長となり、ストライキなどで辣腕を振るう）を事務局に紹介してくれるなど、当初は協力を惜しまなかった落合であったが、やがて「それは向かっている方向が違うだろう」と告げて選手会を離脱していった。

落合は、「なぜ統一契約書の問題から、真っ先に着手しないのか？」という考えだった。統一契約書こそが、NPBがつくったくびきであり、選手の自由を制限する保留条項もまさにそこに明記されている。こつこつと待遇や環境の改善の話をするのではなく、「敵の本丸をすぐに攻めろ」という強い意志を持っていた。

「でも統一契約書の問題をいきなり持ち出しても、一般の人たちには理解されない。戦略として、マスコミを敵に回してはいけないと俺は思っていた。プロ野球選手が置かれている厳しい環境を具体的に知ってもらい、そして組合という存在を発信してもらって世論を

味方にする。それが中畑流。ただ落合はやっぱり〝オレ流〟なんだよ」

落合はＦＡ制度の導入よりも統一契約書の改定を主張して組合を離脱する（１９９１年）のだが、１９９３年オフにＦＡ制度が導入されると真っ先に権利を行使した。これもまた〝オレ流〟であろうか。

話を１９８５年のオフに戻す。組合は設立したが、ここからまた労使交渉という大きな仕事が待っていた。あらためて中畑に当時の努力の軌跡を聞いた。

「主に機構側の選手福祉委員会と交渉するんだけど、そこは各球団の親会社から管理職クラスが来ていて、たいてい５対１での話し合いなんだ。もちろんこちらが１だよ。俺は野球バカだったけど、労使交渉をやってきた百戦錬磨の人たちと対等に渡り合うために必死で勉強したね。何を言われても反論できるようにシミュレーションしたし、キャッチボールの精神で機構側の相手も尊重したから、あの時代の選手福祉委員会の人には俺、信用あると思うんだ」

そうした交渉の中で、特に今でも記憶に残るやりとりがあった。

「この組合構想は、本当に君ひとりの考えなのか？」と聞かれたのである。「俺が妙に詳しいのでバックに誰かいると思われたんだろうな」

「野球選手にそんな知恵はないだろう」という侮った発想である。しかし元来、組合は汗にまみれて生きる肉体労働者のものである。「俺は5ページも本を読めないが、5秒で決断できる能力がある」とは、たたき上げの電気工でノーベル平和賞を受賞した、ポーランド自主管理労組「連帯」のワレサ議長の言葉だ。

中畑は労働法も独学で学んで、食らいついていった。

オフが明け、春季キャンプも終えていよいよ、選手の権利獲得に向けてのシーズンを迎えることとなった。ところが、1986年の開幕を直前に控えた4月2日に激震が起こる。ヤクルトスワローズ（現・東京ヤクルトスワローズ）選手会が突然、労組からの脱退を発表したのである。

同日夜、ヤクルト選手会の角富士夫（すみふじお）会長は神宮球場で記者会見を行い、「我々は現状で満足しており、労組が何であるか理解できない」との理由から、脱退することを表明した。同席した前会長の八重樫（やえがし）幸雄も「私のときに（選手会労組への）入会届を出したが、そのときは年俸や年金交渉で、選手側の立場を強くするためということで、ストなどの話はなかった。ストやオールスター戦のボイコットなどが出てくると話が違う。組合の方針なども我々のところまで知らされず、いきなりマスコミで公表され、ついていけない」と発言

している。

これは中畑が「機構側との交渉の結果如何によっては、オールスター戦のボイコットも辞さず」と発言したことに対しての反応であった。脱退届は午前中のうちに、角会長からホテルで合宿中の中畑にすでに手渡されていた。

内容は「ヤクルト選手会は球団と表裏一体のもので、集団の力を借りて交渉しなくても、我々の求めるものは常識の線で満たされている。ヤクルト選手会はとりあえず組合入会を辞退し、オールスター戦終了時までにチーム全員の総意をとりまとめたい」とあった。

会見のコメントや文書だけを見ると、ヤクルトの選手たちは現状に満足しており、組合設立の意義自体に懐疑的になったことで自発的な脱退行動に出た、と読み取ることができる。しかし、実情は違っていた。ヤクルト本社には労働組合が存在しない。その親会社からの明らかな圧力があった。

のちにヤクルトの古田敦也選手会長が類まれなリーダーシップを発揮して、スト権行使により球界再編の危機を乗り切ることになるのだが、この時代のヤクルト選手会は松園尚己オーナーによる切り崩しに遭っていた。

「あの会見のあと、尾花（高夫・ヤクルト）がすぐに俺のところに来てくれてね。『すみま

せん。待っていてください。絶対に再加入しますから』と言うんだ。松園さんにいろいろと詰められたらしいんだな。俺が『そういうことを許さないために組合はあるんだよ。どんどん俺たちを利用してくれよ』と伝えると、尾花は『わかっています』と言ってくれた」

中畑は尾花を信じて、ヤクルト本社から支配下選手たちに圧力がかかっていたことをマスコミにも一切口外せず、ひたすら待った。当時、ヤクルトの選手は巨人戦で出塁すると、一塁のポジションにいた中畑から、組合に戻れと説得されるので、早く二塁に行こうとアウトになるのも覚悟の上で頻繁に盗塁を試みたと言われていた。それを本人に当てると、否定も肯定もせず、声を出さずに笑った。

「時間はかなりかかったが、尾花は約束をしっかりと履行してくれた」

中畑は獲得した権利について今、こんな総括をする。

「最低保証年俸の改正については、球場に行くと若い連中から『ありがとうございます』とよく言われたね。二軍は280万を360万円（当時）に、一軍は600万を840万円にしたからね」

年俸が840万円以下の二軍の選手でも一軍に出場登録されれば、出場するしないにかかわらず、試合数ごとに日割りで差額を加算することにした。いわゆる一軍追加参稼報酬

である。これは選手を使うか使わないかは関係ないので、采配を振るう監督にとっても好評だった。一方で実力の世界であり続けることは、競技力向上のためにもこだわった。

「二軍にいるのにあまりにも恵まれ過ぎているというのも、プロとしておかしいでしょ。そこは何から何まで守ってあげるというのではなくて、一軍を目指すモチベーションも考えての最低保証だった」

中畑は会長職を退任し、現役を引退してからも、選手会の活動を常に見守ってきた。後進たちも意志を継ぎ、もう40年の歴史が経過しようとしている。

その中畑には、残念に思っていることが一つある。それは年金制度の廃止だ。年金は一軍・二軍合計で10年間在籍した選手の引退後、55歳から年間約１２０万円が支給されていたが、財源不足を理由に２０１１年に廃止された。

「自分が何をテーマに選手会をつくったかというと、年金制度の充実だったんだよ。選手の引退後の生活不安を払拭させたかった。だから年金制度が廃止されたことには、悔しさが残るね。あのまま残っていれば、国民年金と終身年金で月12万～13万円。それだけあれば、何とか食っていけただろうからね」

中畑は１９８７年7月に発行された選手会の会報『かいおん』にこう書いている。

平均寿命六〜七年と言われ、一年ごとの非常に不安定な契約形態の中で、心身ともに消耗し、かつ拘束される野球がいかに厳しいスポーツであるかはおわかり頂けると思います。多くのファンの注視の中、プライベートな生活をも犠牲にしていることを考えると、やはり野球界独自の労使間のシステムを確立していく必要が有り、その為の方策として、労使間協約を早急に締結し、自らの手で待遇改善を行っていくべきであると確信致します。

ここにある言葉を噛みしめると、選手に対する愛情の深さを感じずにはいられない。ケガでもすればすぐにクビになる不安な環境を少しでも改善してプロとしての待遇を整備したい。そのためにも年金は重要であった。

すべてが理想通りになったわけではない。それでも大きな成果を後世に残したことに変わりはない。一方、野球選手・中畑にとって残酷であったのは、この組合創設活動のタイミングが、現役時代の最も脂の乗った時期と重なってしまったことである。

中畑には、あの頃の野球選手としての記憶がない。気持ちとしてはいい打撃成績を上げ

て労使交渉のテーブルにつきたかったが、打率も落ちた。

「でも自分一人じゃなくて、12球団の選手の生活を背負っていたからね。十字架とはこういうものかと思いながら、それなりにかたちを残せた。悔いはないね」

１９８４年の中畑は、選手として１３０試合にフル出場し、出塁率と長打率を足し合わせたＯＰＳも０・９１１を叩き出している。０・８００を超えれば強打者と言われる指標が傑出しており、翌85年においてもプレーに集中したくないはずがなかった。それでも誰かがやらなければならない仕事に挑んでいった。

この年、中畑が主導して日本プロ野球選手会を労働組合として法人登記したことが、19年後に起きた球界再編へのストライキにつながっていく。打撃タイトルには無縁であっても、日本の野球において紛れもなく大きな歴史を彼は刻んだ。

労組日本プロ野球選手会をつくった男たち
木村元彦

発　行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定　価：2,200円 (10％税込)
発売日：2025 年 11 月 6 日
ＩＳＢＮ：978-4-7976-7471-2

ネット書店でのご予約･ご注文は こちらからどうぞ！